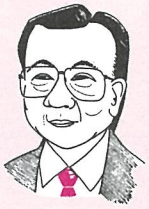
町長ひとりごと ㊼

斉藤 譲



今年もまたいつもと変わらぬ春がめぐってきた。落葉樹の小枝に、木の芽が頭を出し、、道端の日溜りにはイヌフグリが可憐な紫の絨毯を敷きつめ、家々の花壇も彩りを増して、春の風を誘っている。冬枯れの中に萎んでいた私達の心にも、小鳥の囀りとともに、再び生の息吹が蘇えってくるのを実感する。万物が躍動をするのも春であり、別れと出合いが交錯するのもまた春である。

春まだ浅い三月のはじめ、光中学校から一六二名の卒業生が、巣立っていった。進学を希望する一六〇名全員が、入試を突破し、就職を希望する二名もそれぞれ自らの選んだ職場への就職が決った。今年の高校入試は、業者のテストが廃止されたことによって、生徒も教師も手探りの状態で、どこの教育現場も少なからぬ戸惑いと混乱があったようである。そんな状況の中で、一人の落ちこぼれもなく、全員が合格を果せたのは、生徒の努力は勿論のことであるが、校長はじめ教師の並並ならない陰の努力があったことも忘れてはならない。

この快挙は、近年の光中学校が、学業やスポーツでめざましい躍進を続けている証左であり、先輩が弛まず情熱を注ぎ、期待を寄せてきた教育が、今ここに花開きつつある感を深くする。これほど嬉しいことはない。学舎を後にする彼等には、それぞれに新たなる出会いが待っている。真っ直ぐに成長して欲しいと願わずにはいられない。

▼光町が誕生したのが、昭和二十九年五月三日のことであるから、今年でちょうど生誕四十周年を迎える。

当時は、いまだ戦後の混乱期から脱け出せないで、国や乱立する地方団体、そして国民も貧しく、その日の糧を求めて汲汲とし、食糧増産が国家の一大目標の時代でもあった。新生光町は、昭和二十九、三十年度と連続して赤字決算となり、合併三年目にして財政建直し計画によって、辛うじて辻褄を合わせるといった切なく厳しいスタートを切ったのである。昭和三十二年から発行をはじめた広報紙には「赤字決算と言う事に就いて」という見出しをつけて緊縮財政の必要性を強く訴えており、草創期のご苦労が偲ばれる。しかし、こんな厳しい情況下において、時の町長はじめ議会、関係者が英断をもって進めた一大事業は、統合中学校の建設であった。昭和三十四年十月発行の広報紙には、「理想的な中学校実現の希望にもえて」という大見出しが踊っている。

草創の息吹

義務教育の仕上げである中学校教育を完全にするためには、今のままの小さな学校では、とうてい満足できないことが、専門的研究の結果はっきりしました。いよいよこの理想実現にふみきるために、じゅうぶん町民各位の納得を願わなければなりません。この大事業が、できるかできないかは町民各位の教育への情熱とご理解にかかっております。

広報紙は、町民に対してこのように悲壮感ただよう呼びかけをし、直ちに全集落を対象に座談会に入っていくことになるのである。

▼その頃は、いまだ旧村意識も残り、特に遠隔にある人達は不安を持っていたことから、座談会も決してスムースに運んだところばかりではなかったようで、会合は数十回に及んだと、当時の資料は記している。しかし、建設を求める人達の熱意は、やがて総ての人の心を動かし、遂に昭和三十五年に建設着手の運びとなるのである。因に、昭和三十四年度の町の予算規模は五、八〇〇万円、うち町税は二、一五〇万円であった。

建設開始から、実に三年の日子と、八、五〇〇万円に上る巨費を投じて、四六、二〇〇平方メートルの広大な校地に、三階建三、一八七平方メートルの近代校舎が完成したのである。昭和三十七年十一月のことである。時の町長深田三郎氏は、その竣工式典で次のような感慨を述べられている。

私に日頃、教育の機会均等を得しめることは社会正義であるとの信念に立っております。本校の統合は実に光町発足以来の念願でありまして合併五ケ年計画樹立に当り責任者の一人としてこれが策定に参加しました私といたしましても合併後八年、今日光中学校々舎竣工式を挙げることは誠に感無量であり、町民のどなたにも劣らぬ深い喜びに浸っておる唯今の心境であります。……

▼当時教育長であった飯田才一氏は、当初計画を町長に提出したところ、「飛行場でも造るのか」と叱られたという話しをよく語る。

この時から数えて、早くも三十一年有余の歳月が流れた。時を超えて、いまあの長岡藩の「米百俵」にも似た、先人の教育に寄せる熱い心意気が痛いほどに伝わってくる。これこそ正に光町草創のたぎる息吹だ。

井戸を掘った人々のご労苦を、決して忘れてはなるまい。